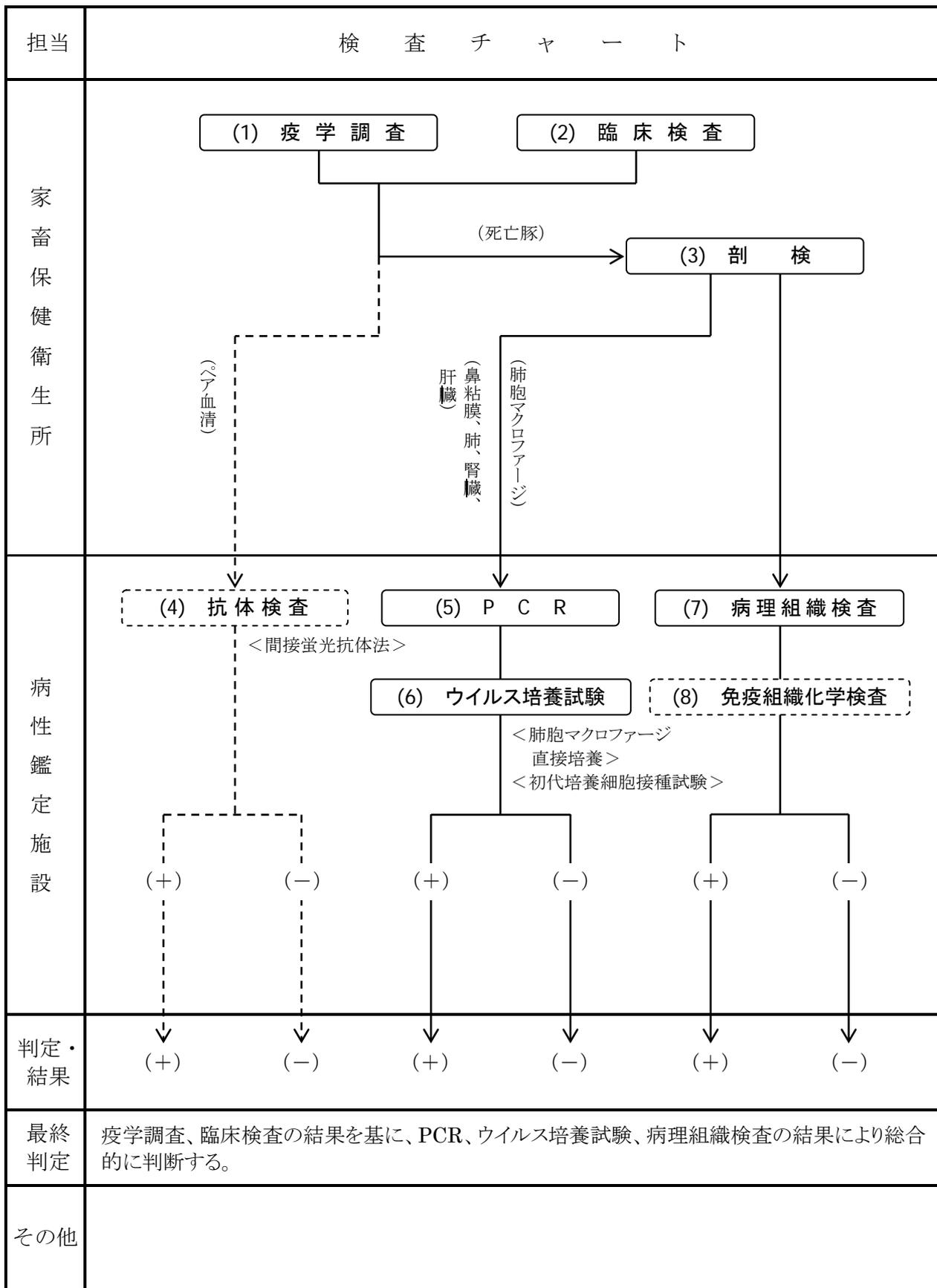


85 豚サイトメガロウイルス病



→類似疾病検査

- ① 79 豚繁殖・呼吸障害症候群 (PRRS) ② 76 オーエスキー病 ③ 81 萎縮性鼻炎
④ 86 豚パルボウイルス病 ⑤ 72 レプトスピラ症 ⑥ 70 豚コレラ(慢性型)

○ 病原体:豚サイトメガロウイルス; Porcine cytomegalovirus [*Suid herpesvirus 2* (属は未分類)、*Beta-herpesvirinae, Herpesviridae*]

(1) 疫学調査

- ① ウイルス自体は広く分布しており、血清学的には90%以上の群の汚染が確認されている。
- ② 抗体陽性豚の鼻汁や尿などとの接触
- ③ 死産や無症状の哺乳豚の死亡がみられる。
- ④ 飼養環境の悪化
- ⑤ 経胎盤感染をする。

(2) 臨床検査

- ① 成豚はほとんど不顕性感染
- ② 感染哺乳豚(3週齢未満)では鼻づまり、くしゃみ、鼻汁の漏出、発咳など、いわゆる封入体鼻炎の症状あるいは貧血(必発ではない。)
- ③ 感染新生子は2~3週間以内に死亡することが多く、生残しても発育不良などヒネ豚になる。
- ④ 妊娠豚に感染すると元気消失や食欲不振などがみられるが顕著ではない。流産は起こらないものの、死産や虚弱子の産出、新生子の死亡がみられる。

(3) 剖 検

哺乳豚では皮下織や胸腔内に浮腫、腎臓などに点状出血がみられることがある。

(4) 抗体検査(間接蛍光抗体法)

中和試験は困難なため、カバースリップ抗原あるいはマルチウエルスライド抗原による間接蛍光抗体法による。陽性率が高く、ペア血清の入手が困難なため、発生農場の疫学的診断として行う。

(5) P C R¹⁾

臓器乳剤を材料としたPCRが可能である。本ウイルスの分離は困難かつ時間がかかるため、迅速性に優れるPCR検査は補助診断として有用である。

(6) ウイルス培養試験(肺胞マクロファージ直接培養、初代培養細胞接種試験)

- ① 肺胞マクロファージ直接培養
培養方法:肺胞洗浄液を採取し、その中に含まれる肺胞マクロファージを集めて、37℃でおよそ2週間培養
成績:CPEとして巨細胞の確認あるいはグリュンワルド・ギムザ染色をして好塩基性核内封入体を確認
同定:培養細胞中の特異抗原の確認
- ② 初代培養細胞接種試験(困難)
使用細胞:清浄肺胞マクロファージあるいは豚卵管上皮(PFT)細胞
接種材料:鼻粘膜、肺、腎臓など
培養方法:37℃で2週間培養
成績:CPEとして巨細胞の確認あるいはグリュンワルド・ギムザ染色をして好塩基性核内封入体を確認
同定:培養細胞中の特異抗原の確認

(7) 病理組織検査

鼻粘膜腺上皮あるいは導管上皮細胞の核内に、特徴的な好塩基性巨大封入体が認められる。腎尿細管などの上皮系細胞、血管内皮細胞、全身組織の細網内皮系細胞ではハローを伴った好塩基性核内封入体が認められる。また、肝臓に巣状壊死が認められる。

(8) 免疫組織化学検査

抗豚サイトメガロウイルスうさぎ血清を用いた免疫染色にて感染細胞の細胞質内に抗原が検出される²⁾。

(参考文献)

- 1) Widen, B.F., et al.: *Infect.* 123, 177-180 (1999).
- 2) 芝原友幸ら: *日獣会誌.* 65, 429-435 (2012).